

三十三観音図成立に関する一考察

立畠 敦子

初期水墨画とよばれる初期的な墨の表現を用い描かれた道釈人物画中、白衣観音図の作例は数多く認められる。この白衣観音のさまざまなバリエーションが三十三幅集まり、一揃いの観音として伝わる作例が、現在数点数えられる。

建長寺白衣観音図三十二幅（以下建長寺本）、長楽寺白衣観音図三十三幅（以下長楽寺本）は、1幅に観音を1図描いた掛幅装の作例である。また東福寺三十三観音図（1412年制作・内2幅は後補、以下東福寺本）三十三幅は、明兆が描いたものとして、また制作年が分かるものとして非常に重要である。

これらの観音の図像は白衣をまとい、二本の腕に数珠や柳の枝、水瓶をもつなど大まかな図像が共通する。さらに建長寺本・長楽寺本には観音の他に北斗七星や韋駄天など特定の信仰を想定できるモチーフが描かれている。

一方、東福寺本は画面が上下に分かれており、画面上部には白衣観音の図像を描く点は先に挙げた2例と同じだが、画面下部には観音の功德・観音の救済や、観音が姿を変えて現れる33身の姿を法華經觀世音菩薩普門品第二十五から引用し描いている。

「観音經」の信仰は奈良時代以来盛んであり、観音を33体の姿であらわしたものとしては、本法寺（富山県）法華經曼陀羅普門品（22幅の内1幅）や、彫刻では長谷寺（神奈川県）三十三応現身立像、三十三間堂中尊光背化仏の観音三十三身が33応現身として仏身、小王身、童女身など33体として現されるものが確認でき、また正嘉元年（1257）観音經絵巻（メトロポリタン美術館）では、33応現身と観音救済の図が組み合わされて描かれている。つまり、建長寺、長楽寺、東福寺諸寺の3例のように、32もしくは33幅の観音図については現存作例があまり多いとは言えず、これまで三十三観音図の成立について言及された研究は少ない。

東福寺本は墨書より三十三観音として制作されたことが確認できる現存する最初期の作例である。しかし、東福寺本が典拠とする図像や教典については確認できていない。同時期の禅僧の語録にそれを求めたとき、「三十二応身」という記述は多く見られるものの、三十三観音についての記述はほとんどない。つまり東福寺本は33という数が意図的に選ばれ、上部図像に白衣観音の図像、下部図像に観音救済や観音説法に図を、単幅の白衣観音図や版本観音經絵から適宜選択され組み合わせ製作されたと考えられるのである。そこには何らかの意図があったと考えるべきである。

東福寺本と同図像の三十三観音図はこれ以降三十三観音図の規範として描き継がれていくが、その背景には東福寺を筆頭とした禅宗寺院を中心とした観音信仰と明兆筆東福寺本の存在が大きいのではないかと考えられる。

本発表は現存する三十三観音図の図像を詳細に検討し諸記録と照らし合わせ、室町初期に成立した三十三観音図の製作過程及び制作背景を試考するものである。